

4 4	大分県立安心院高等学校外 9 校	27～30
-----	------------------	-------

## 平成30年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

「国際的視野で地域を捉える力」、「地域の課題を国際的視野で解決する実践力」および「英語をツールとしたコミュニケーション力」をグローバル社会に生きる資質・能力とし、それらを育むために地域特有の文化・歴史・自然（農業）と国際社会の動向を教材として取り入れながら、村おこし・町おこし・国際交流や様々なボランティア活動の実践を学び、それらを軸として英語の学びやその他の教科の学びを生かせるよう関連づけをした「新教科」を設定し、その系統的な教育課程、指導方法、評価に関する研究を小中高12年間通して行う。

### 2 研究の概要

小学校では農業やグリーンツーリズムなどの地域の課題・地域の実践を教材として、中学校では小学校での学習を発展させ、県内外における課題・実践を教材として課題解決的な学習活動及び体験的な学習活動を行い、単元及び教材、学習活動、学習評価を研究する。さらに、高校ではローカル、グローバル双方の視点から地球全体をとらえ、社会の一員として顕在化する課題、潜在する課題等についてその解決方法を論理的に考え、主体的に行動することを促す単元及び教材、学習活動、評価について研究する。この新教科を軸として英語及び他の教科の学びを効果的に関連づけた系統的な教育課程、学習活動、学習評価について実践研究をすることにより、国際社会で必要とされるコミュニケーション力や論理的思考力、課題解決力・実践力を持った児童生徒の育成、「村おこし・町おこし・起業・国際交流・ボランティア活動」等において地域や社会に貢献できる人材の育成を目指す。

年次	新教科の構築	連携推進
第一 年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 評価規準の作成</li> <li>・ 年間指導計画の作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小中高合同研修会</li> <li>・ 小中高先進地視察</li> <li>・ 小中高校内研究会への相互参加</li> </ul>
第二 年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域資源を活用した教材開発と実践</li> <li>・ 評価規準の再検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小中高新任者研修</li> <li>・ 小中高合同研修会</li> <li>・ 小中高先進地視察</li> <li>・ 小中高校内研究会への相互参加</li> <li>・ 新教科ポスター作成</li> </ul>
第三 年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 統一ポートフォリオの作成と実践</li> <li>・ ルーブリック評価の実践</li> <li>・ 身につけたい力の一覧表作成</li> <li>・ 「地球未来科」との教科横断型授業の提案</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小中高新任者研修</li> <li>・ 小中高合同研修会</li> <li>・ 小中高先進地視察</li> <li>・ 小中高校内研究会への相互参加</li> <li>・ 中間発表会</li> <li>・ 教育フォーラム開催</li> <li>・ 新教科パンフレット配布</li> </ul>
第四 年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「地球未来科」の実践</li> <li>・ 「地球未来科」との教科横断型授業の先行実施</li> <li>・ 研究紀要作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小中高新任者研修</li> <li>・ 小中高合同研修会</li> <li>・ 中高先進地視察</li> <li>・ 小中高校内研究会への相互参加</li> <li>・ 地球未来科通信の発行</li> <li>・ 研究発表会開催</li> </ul>

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究仮説

12年間の系統性を考えた新教科の構築を目的とし、地域の課題や地球規模の課題についての課題解決的及び体験的な学習活動を行うことで、児童生徒に社会の諸問題に主体的に関わろうとする意欲が涵養されるとともに論理的思考力、コミュニケーション能力、実践力等が向上し、グローバル社会を主体的に生きる人材をはぐくむことができるであろう。

#### (2) 教育課程の特例

- ・小学校では、生活科・総合的な学習の時間から時数を充てる。
- ・中学校では週2時間、年間70時間、高等学校では週1時間、年間35時間を設定し、総合的な学習の時間から時数を充てる。

### 4 研究内容

#### (1) 教育課程の内容

- ①教育課程表は【別紙】の通りである。
- ②KEY STAGE 制を導入し、12年間の評価規準を作成した。その評価規準をさらに発展させた「身につけたいカー一覧表」をもとに一つの教科として小中高と積み上がっていくように年間指導計画を立て、連携校で取組んだ。KEY STAGE 1・2では季節や農産物など身の周りにある地域素材を題材とし、KEY STAGE 3ではグリーンツーリズム体験や他地域との交流・比較、KEY STAGE 4では外国人留学生を招いた地元ツアーガイドや幼稚園児・小学生向けのゲストティーチャー活動など、体験的かつ課題解決的な学習活動を実施した。
- ③評価方法については、昨年度に引き続き、KEY STAGE ごとに統一した様式でポートフォリオを集積し、ルーブリック評価を実施した。また、単元に併せて探究シートやリフレクションシートなどを作成し活用する事例も確認できた。
- ④授業研究の実践例は以下の通りである。

KEYSTAGE	学年	テーマ
KEY STAGE 1	小1	たのしいあきをいっしょにたのしもう
	小2	にこにこま～あるくすてきなひとみつけ
KEY STAGE 2	小3	「安心院の七不思議」調査隊
	小4	伝えよう広げよう安心院の鏝絵！
	小5	作ろう！笑顔全力米！目指そう！きれいな安心院町！
KEY STAGE 3	小6	やさしさいっぱいどけ隊！
	中1	安心院の未来をよくする方法を考えよう
	中2	安心院観光 未来プロジェクト
KEY STAGE 4	中3	安心院未来会議
	高1	「安心院・院内学」
	高2	「ゴールデンツアー」
	高3	「班（個人）研究」

#### (2) 研究の経過（4年次）

- ① 新教科「地球未来科」の実施・改善に関する企画会議を以下の通り開催した。  
第1回 4月5日 第2回 4月13日 第3回 4月20日 第4回 4月27日

第5回 5月11日	第6回 5月18日	第7回 6月1日	第8回 6月8日
第9回 6月15日	第10回 6月22日	第11回 6月29日	第12回 7月6日
第13回 7月27日	第14回 8月3日	第15回 8月17日	第16回 9月7日
第17回 9月28日	第18回 10月5日	第19回 10月19日	第20回 11月2日
第21回 11月30日	第22回 12月14日	第23回 1月18日	

② 小中高連携した実践は以下の通りである。

- ・ 本地域における小中高生の学びの実態把握
- ・ 小学生による鑑絵ツアーガイドへの高校生参加
- ・ 高校生による小学生への出前授業の実施
- ・ 高校英語科・数学科教員による中学校への乗り入れ授業の継続実施
- ・ 中学英語科教員による小学校への乗り入れ授業の継続実施

③ 研究開発を推進する取組は以下の通りである。

- ・ 小中高教頭会の設置
- ・ 新任者研修（4月16日） （目的） 研究概要と30年度取組内容を周知する
- ・ 新年度チーム会議 （目的） 研究の継続・準備について検討する
- ・ 研究主任会 （目的） 全校での共通理解や各校での実践を支援する  
第1回 5月15日 第2回 7月12日
- ・ 小中高合同研修会 （内容） 小中高実践報告及び指導案審議
- ・ 広島県立大崎海星高等学校視察 （目的） KEY STAGE3の教材開発の推進
- ・ 校内授業研究会の小中高相互参観

④ 地域や保護者との連携及び広報活動に関する取組は以下の通りである。

- ・ 小中高合同地区PTA懇談会の実施
- ・ 研究大会への保護者参観
- ・ 高校生によるこども園への出前授業の実施  
（園芸マネジメントコースによる「ふれあい農園」）

⑤ 研究開発に関する評価

運営指導委員会の開催	第1回 7月19日	第2回 11月15日
小中高校長会の実施	第1回 4月6日	第2回 5月25日
	第3回 7月11日	第4回 9月4日
	第5回 10月24日	第6回 12月20日
	第7回 1月30日	第8回 3月19日
研究発表会	11月14日	

### （3）評価に関する取組

ルーブリック評価による児童生徒の自己評価を集計した。概要は以下のとおりであり、単元の前後で「捉える力」や「解決する力」が向上したと考える児童生徒は増加していることから、連携校で扱う教材や単元設定は妥当であったといえる。学年末や単元末には蓄積されたポートフォリオを整理しながら、根拠を明確に自分が学んだことや成長したことを論述させるようにした。こうした積み重ねが論理的思考力につながると考えられる。

目的： 連携校での研究であることを踏まえて、児童生徒の自己評価から、指導方法の効果や妥当性を検証・整理し、評価規準の共通理解を得るとともに学習指導計画に活用するため。

実施時期： 5月～11月

対 象： 連携校の児童生徒

実施方法： ①生徒は授業終了時にポートフォリオへ自己評価を記入する。

②各校の学習活動における単元のはじめを1回目、単元の終わりを2回目として自己評価を集計する。

評価項目： 「捉える力」、「解決する力」

【KEY STAGE2】のルーブリック例

	学習活動	S	A	B	C
解決する力	院内の石橋のすごいところを考えよう。	院内の石橋のすごいところを、理由をつけたり、他の考えと合わせたり比べて話し、話すことができた。	院内の石橋のすごいところを、理由をつけて、話すことができた。	院内の石橋のすごいところを話すことができた。	院内の石橋のすごいところを話すことができなかった。

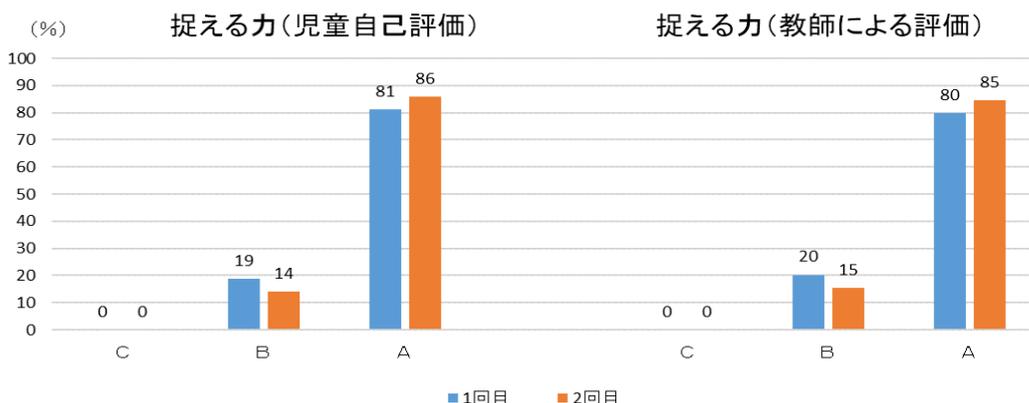
【KEY STAGE 1】 A(期待以上である) B(期待通りである) C(努力を要する)

【KEY STAGE 2～4】 S(期待以上であり+αがみられる) A(期待通りである)

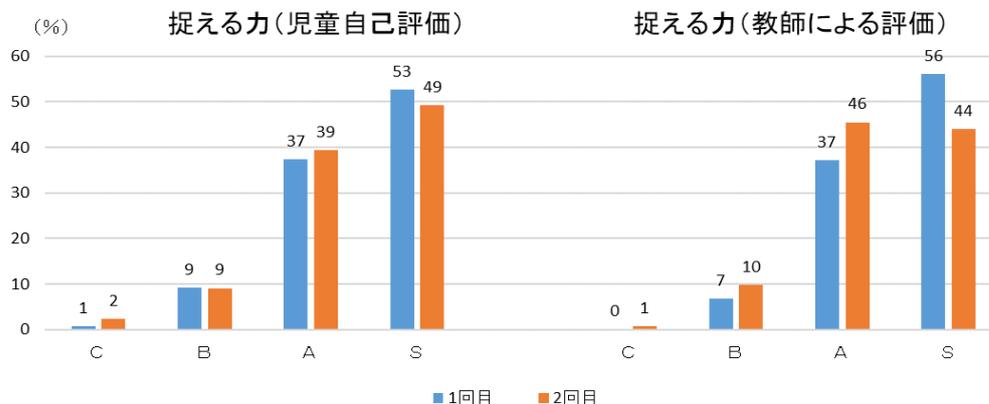
B(おおむね期待通りである)

C(努力を要する)

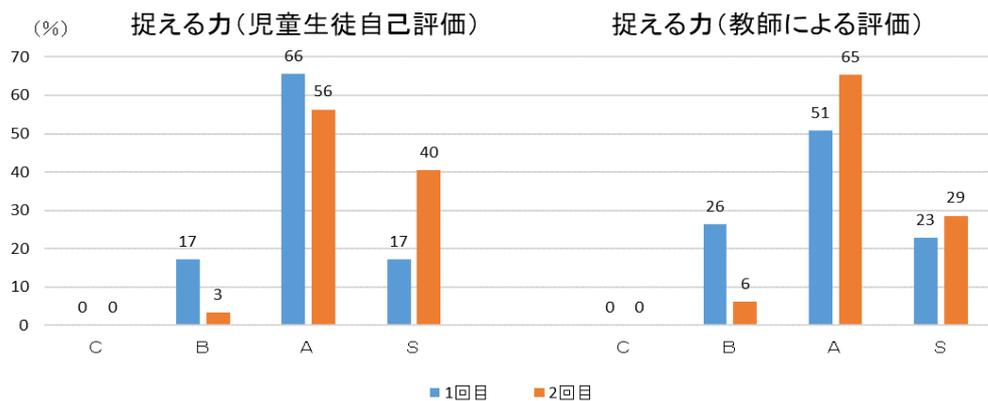
【捉える力 KEY STAGE 1】



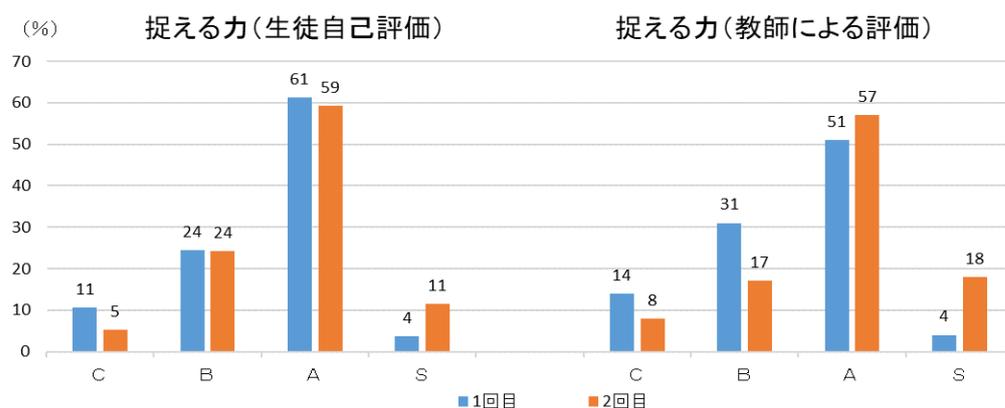
【捉える力 KEY STAGE 2】



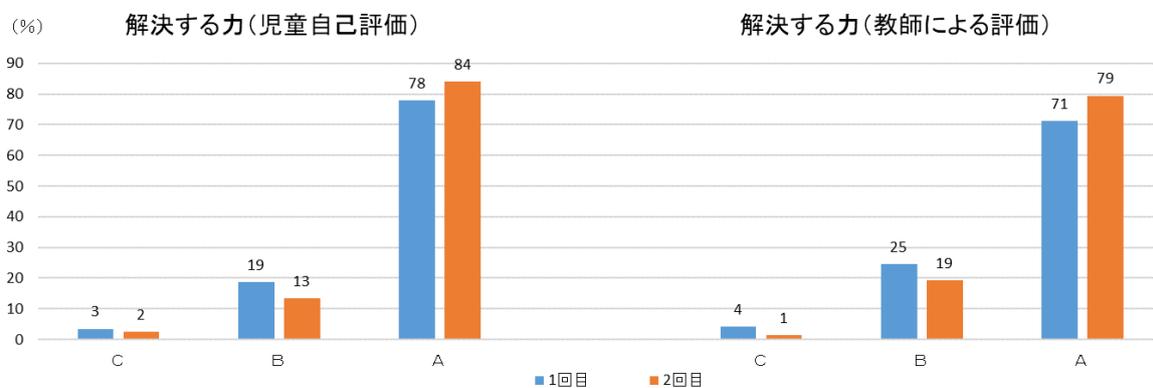
### 【捉える力 KEY STAGE 3】



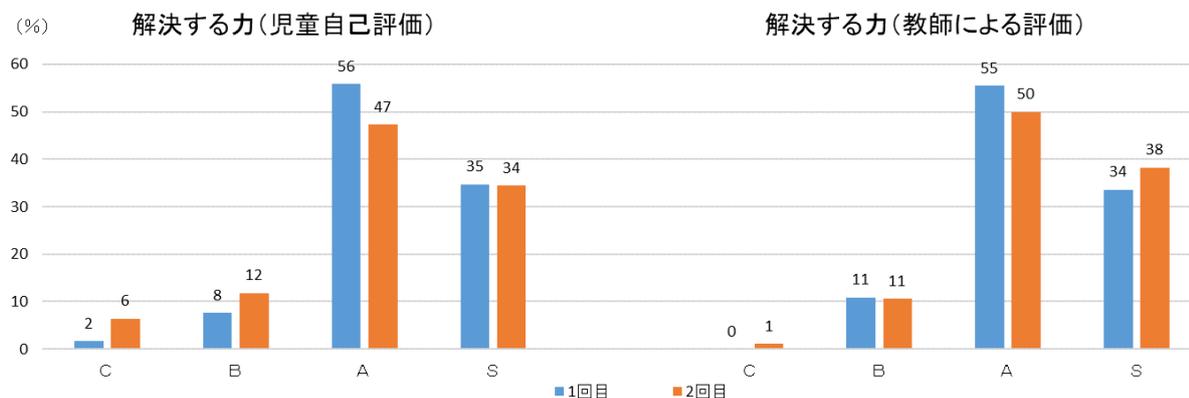
### 【捉える力 KEY STAGE 4】



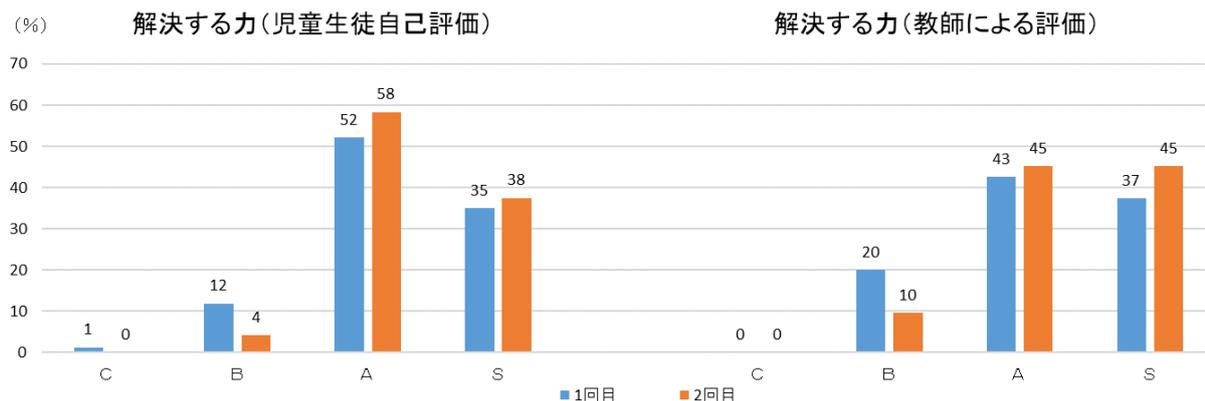
### 【解決する力 KEY STAGE 1】



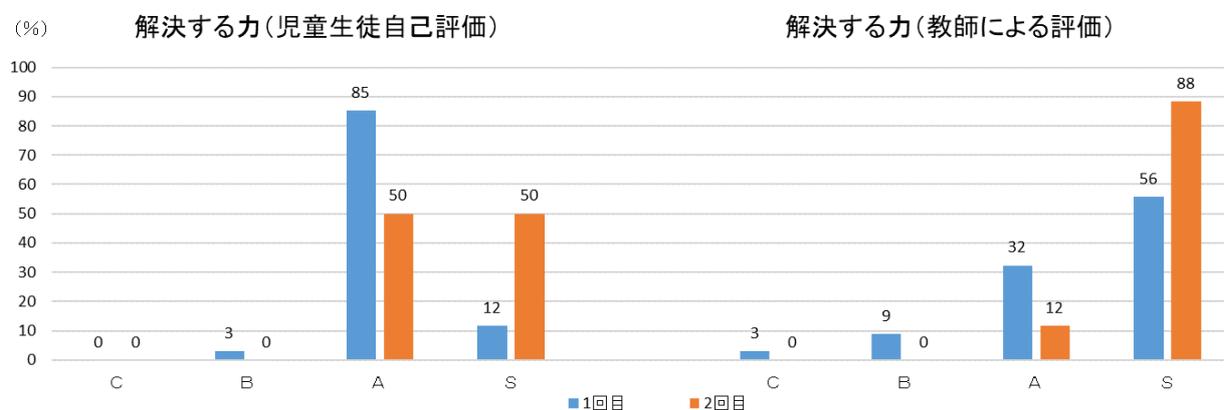
### 【解決する力 KEY STAGE 2】



## 【解決する力 KEY STAGE 3】



## 【解決する力 KEY STAGE 4】



## 5 「研究開発の成果」

### (1) 実施による効果

#### 1) 児童生徒への効果

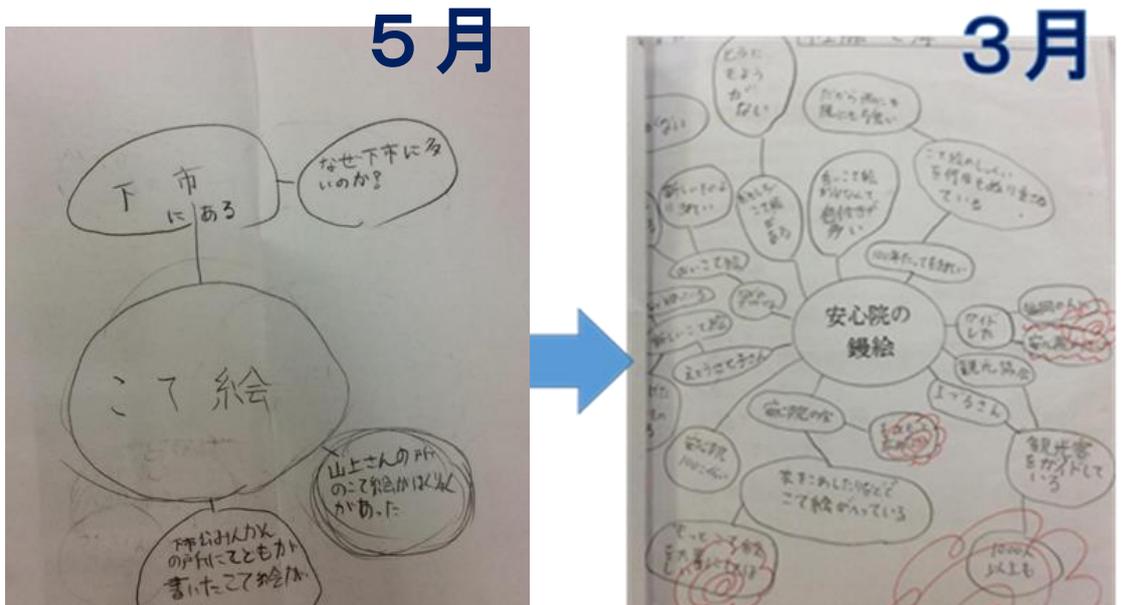
これまでの実践から、各学校で扱う教材や学習内容は固定化されてきたが、それは緩やかで変更も可能なものである。取組内容は児童生徒の実態や興味に合わせて毎年見直しをして取り組むようにしてきた。しかし、興味がありそうだからと言うだけでは、児童生徒たちは主体的にはならない。本気で「解決したい」「もっと知りたい」「もう1回行ってみたい」と児童生徒たち自身が思うような工夫が必要であり、そのKEY STAGE ごとの事例を以下に示す。また、最終年度から行っている異年齢集団によるゲストティーチャー活動では、児童生徒の「主体的態度」と「解決する力」の育成に効果的であることが、児童生徒のアンケートや授業中の見取りなどからわかってきた。12年間の出口にある高3生徒の進路意識にも変化が見られ、2017年度と2018年を比較すると具体的に地域社会への貢献を意識した進路を選択する生徒の増加が特徴的であった。

#### 【KEY STAGE 1】

年長さんとのふれあいをきっかけにして、お兄さんお姉さんになった自分たちが来年入学する年長さんたちを「お世話したい」する取組をした。自分たちが楽しむことから、年長さんを楽しませたいという相手を意識した課題により、目的意識が広がった(小1)。思考ツールの活用については、ウェビングでイメージを広げる「Xチャート」で仲間分けをする等の活動をした。視覚化されることでグループでの活発な話し合いはできたが、全体での交流場面では、飽きてしまうような児童も多かった。黒板を思考ツール代わりに、学級全体で比べたりつなげたりできるような工夫が必要である。

## 【KEY STAGE 2】

安心院の饅絵について調べる中で、饅絵の価値やそれを大切に守り広げていこうとする地域の人の思いや願いを学ぶ一方、思ったほど饅絵を見に来る観光客の数は多くなかったという事実を知り、愕然とした。そして、「何とかしたい」「安心院の自慢である饅絵を広げたい」という切実感のある課題が生まれた。自分たちの思いと現実とのズレや隔たりを子どもたちが感じたときに、本気で「解決したい」と思うことが明らかになった（小4）。思考ツールの活用については、「比べる」「関連付ける」「多面的・多角的にみる」などの考える技を示すようにした。また、子どもたち自身の判断により思考ツールを選択・複合的に使う様子が確認でき、経験を重ねることによる思考力の深まりが見られた。引き続き、発達段階に合わせた思考ツールの活用を継続していきたい。



ポートフォリオを整理しながら5月のウェビングと学年末3月のウェビングをビフォーアフターの視点で比べると、饅絵のよさ、町や人の良さについての多くのことを学んだことが分かる。

## 【KEY STAGE 3】

『安心院の未来予想図を作ろう』という単元を設定し、地域に住む人たちの思いや願いを調べていった。年代別にわけてアンケートをとり、中学生がこれからの安心院町に期待していることと、大人や高齢者が期待していることを比較検討することで論理的に思考し、より具体的に実現可能な提言へ繋げることができた（中1）。

## 【KEY STAGE 4】

外国人向けに行われる「ゴールデンツアー」では、事前に生徒が考案した地元ツアーを留学生へプレゼンテーションし、修正改善を加える。ツアーガイド実施後、報告会をすることで学年全員による振り返りの時間を確保した。ツアー現場では事前に準備したことを使いながら状況に応じて解決する姿や、実践の積み重ねにより生徒に自信が付き、それが主体的態度やコミュニケーション力の育成に繋がる様子が確認できた（高2）。

## 2) 教師への効果

- ①「地球未来科」を中心とした教科横断型授業への取組を、教科担当制である高校においてスクールプランに掲げたことで、個人レベルでの授業改善に繋げることができた。
- ②「地球未来科」に関する小中高合同研修会を開くことで、連携校職員全体で俯瞰的な視点に

立った教育活動をイメージすることができ、校種の隔たりを超えるような異年齢集団における学習活動の展開に繋げることができた。

- ③研究が進むに連れて、県外にある地域の連携教育に取り組む学校と交流を深めることができた。これにより中学校では他地域との比較により批判的思考力を育成するような教材開発に取り組むことができたり、高校では全国でどのような連携教育が実践されているかを「知る」きっかけになった。今後地域の連携教育について他の事例を「知ること」から「意見交換や議論」にまで発展させるための段階を踏むことができた。
- ④高校では新学習指導要領にあるように各教科に探究科目が設定され、科目内で探究活動や合教科型授業の展開を完結させることも可能となる。そのため、総合的な探究の時間をどのように扱うかについては、学校間で異なり幅も広がることが予想される。総合的な学習の時間を充てている「地球未来科」では教育活動の視点が学校内での展開にとどまらず、連携した枠組みの中にあり、より幅のある深い学びに繋がる。このような視点に教科担当制色の強い高校現場の教員が触れることは新学習指導要領のもとでの探究活動や総合的な探究の時間を考える礎となる。

### 3) 保護者への効果

小中高の職員の参加体制を整え、各小学校区で地区懇談会を開いたり、地球未来科の授業で地域の方による出前授業や取材などを生徒と共に活動する場面を多く設定した。また、安心院・院内地域は高齢化率 44% の高齢過疎地域であり児童生徒数は減少しているが、地域外からの安心院高校への進学希望者が増加しており入学定員を大きく下回ることはない。これは本地域の教育活動が地域から地域外へ認知されている成果といえる。

## (2) 研究実施上の問題と今後の課題

### 1) 組織の改善

#### ① KEY STAGE をつなぐ取組について

KEY STAGE が当初の目標設定に対して十分に機能していないことが挙げられる。連携教育は地域に点在する小学校間及び中学校間の横の連携を踏まえた上で、縦の連携が可能となる。そのため小中高合同研修会や校種別部会を設定し組織的な取組を進めてきた。結果として、入口のはっきりしている小学校と出口の見えている高校では「身につけたい力一覧」に沿って目指す児童生徒像が明確化し、単元計画も軌道に乗ってきているが、KEY STAGE をつなぐ中学校では模索が続き、中学校同士の横の連携がとれるようになったのが最終年度であった。ポートフォリオの形式や評価方法をそろえるなどの統一した取組はできているが、KEY STAGE 3 における継続的かつ連続性のある成果がまだ見えない。来年度より KEY STAGE 4 において 4 年間通した単元設定が可能になるが、同様に KEY STAGE 3 で中学校が要となり横と縦の足並みがそろった時に、次の段階として KEY STAGE が生きてくると考えられる。

#### ② 連携校と連携教育の捉え方

連携校として設置された学校は、その地域における連携教育の在り方について共通認識を持ち、教育活動に取り組む必要がある。特に、地域のコーディネーター等が配置されておらず、学校現場が主体となる本地域では、各学校のリーダーである管理職の共通認識は「地球未来科」を柱とした教育活動の推進に必然であり、適切な助言により各校の研究や連携教育が深まる。そのため、次年度から実践部会に校長間の意識統一と研修を目的とした校長部会を設定する。組織的な取組を定着させることは、諸条件が変化しても持続性のある教育活動に繋がる。

### 2) 教科に関する課題

#### ① KEY STAGE の区切りについて

地球未来科は各教科との関連が欠かせない教科であるが、本研究では校種の繋ぎを優先し

たため KEY STAGE 2 と KEY STAGE 3 の区切りと、各教科の目標の区切りが一致していない。小学校 5, 6 年は同じ KEY STAGE にするなど、カリキュラム全体を見通した KEY STAGE の区切りを再検討する。

②「英語をツールとしたコミュニケーション力」の位置づけについて

新学習指導要領により小学校英語が教科で設定され、地球未来科での英語ツールとの差異が不明瞭になり「英語をツールとしたコミュニケーション力」の位置づけを見直すことが挙げられる。

③異年齢集団における学習の場について

最終年度に取り組み始めた異年齢集団によるゲストティーチャー活動は、児童生徒の「学びに向かう力」「解決する力」の育成に効果的であることがわかった。小中高教科部会の設定など組織的に取り組むような体制を作り、双方向からの視点を取り入れた学習活動を実践できれば、「地球未来科」がより連携教育としての柱となり地域の学校の連携教育の教育課程を有機的に展開することができる。

④児童生徒の見とりについて

小学校の教員はポートフォリオの集積から、児童一人一人の活動の様子を読み取り、適切に次の学習へ活かしたり、コメントを記入している。KEY STAGE 4 でも生徒の自己評価に対して教員がコメントをするようなしかけを設け実践したが、評価の妥当性を共有したり、確認したりするまでには至っていない。中学校・高校の探究活動を適切に評価したり、その評価の妥当性をアドバイスできるような人材は希であり、小中高合同研修会の場を充実させるよりも、異年齢集団での双方向からの視点を取り入れた学習活動を実践するにあたり意見交流をする方が直接的であり、効果も高いと考えられる。

【別紙1】教育課程表

安心院・院内地域7小学校 教育課程表（平成30年度）

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	総合的な学習の時間	外国語活動	地球未来科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育							
第1学年	306 0	* 0	136 0	* 0	0 (-102)	68 0	68 0	* 0	102 0	34 0	34 0	* 0	* 0	102 (+102)	850 0	
第2学年	315 0	* 0	175 0	* 0	0 (-105)	70 0	70 0	* 0	105 0	35 0	35 0	* 0	* 0	105 (+105)	910 0	
第3学年	245 0	70 0	175 0	90 0	* 0	60 0	60 0	* 0	105 0	35 0	35 0	0 (-70)	* 0	70 (+70)	945 0	
第4学年	245 0	90 0	175 0	105 0	* 0	60 0	60 0	* 0	105 0	35 0	35 0	0 (-70)	* 0	70 (+70)	980 0	
第5学年	175 0	100 0	175 0	105 0	* 0	50 0	50 0	60 0	90 0	35 0	35 0	0 (-70)	35 0	70 (+70)	980 0	
第6学年	175 0	105 0	175 0	105 0	* 0	50 0	50 0	55 0	90 0	35 0	35 0	0 (-70)	35 0	70 (+70)	980 0	
合計	1461 0	365 0	1011 0	405 0	0 (-207)	358 0	358 0	115 0	597 0	209 0	209 0	0 (-280)	70 0	487 (+487)	5645 0	

安心院・院内地域2中学校 教育課程表（平成30年度）

	各教科の授業時数										道徳	総合的な学習の時間	特別活動	地球未来科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	外国語						
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	35	0 (-50)	35	50 (+50)	1015
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	35	0 (-70)	35	70 (+70)	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	35	0 (-70)	35	70 (+70)	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	105	190 (-190)	105	190 (+190)	3045



【別紙2】

学校等の概要（平成30年度）

研究歴

(1) 大分県立安心院高等学校・宇佐市立安心院中学校・宇佐市立院内中学校

平成12年～14年度 研究開発学校指定（連携型の中高一貫教育における6年間の一貫性を図る教育課程の創造）  
 平成15年～17年度 研究開発学校指定（連携型中高一貫教育による学力の向上と進路指導の充実を図る教育課程の創造）  
 平成18年～20年度 研究開発学校指定（名目指定）  
 平成22年～24年度 研究開発学校指定（世界基準の確かな学力を育成する小中高一貫した系統性ある教育課程の創造～読解力を基盤とした「リテラシー」の獲得～）  
 平成25年度 研究開発学校指定（名目指定）

(2) 宇佐市立安心院小学校・宇佐市立佐田小学校・宇佐市立深見小学校  
 宇佐市立津房小学校・宇佐市立院内中部小学校・宇佐市立院内北部小学校  
 宇佐市立南院内小学校

平成22年～24年度 研究開発学校指定（世界基準の確かな学力を育成する小中高一貫した系統性ある教育課程の創造～読解力を基盤とした「リテラシー」の獲得～）  
 平成25年度 研究開発学校指定（名目指定）

1 学校名、校長名

大分県立<sup>アジマ</sup>安心院高等学校（全日制普通科）

安藤 耕平（アノウ コウヘイ）

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 大分県宇佐市安心院町折敷田64番地 電話 0978-44-0008  
 FAX 0978-44-0264

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	77	2	77	2	67	2	221	6
	合計	77	2	77	2	67	2	221	6
計		77	2	77	2	67	2	221	6

4 教職員数

校長	教頭	事務長	主幹教諭	指導教諭	教諭	養護教諭	講師	非常勤講師	ALT
1	1	1	1	1	19	1	7	10	1
事務職員	事務補佐員	臨時実習教師	臨時農務技師	臨時司書	計				
2	0	1	1	1	48				

**1 学校名、校長名**大分県宇佐市立<sup>インナイ</sup>院内中学校

須藤 善夫（スドウ ヨシオ）

**2 所在地、電話番号、FAX番号**

所在地 大分県宇佐市院内町山城 54 番地

電話 0978-42-5008

FAX 0978-42-5035

**3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数**

第1学年		第2学年		第3学年		特別支援学級		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
25	1	21	1	32	1	3	2	81	5

**4 教職員数**

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	養護教諭	臨時講師
1	0	1	0	0	8	1	1
非常勤講師	非常勤事務職員	スクールカウンセラー	ALT	主事	学校司書	支援員	計
0	1	1	0	1	1	1	17

**1 学校名、校長名**大分県宇佐市立<sup>アジム</sup>安心院中学校

永松 一郎（ナガマツ イチロウ）

**2 所在地、電話番号、FAX番号**

所在地 大分県宇佐市安心院町下毛 2222 番地の1

電話 0978-44-0004

FAX 0978-44-0078

**3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数**

第1学年		第2学年		第3学年		特別支援		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
32	1	41	2	34	1	1	1	108	5

**4 教職員数**

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	臨時講師	非常勤講師
1	0	1	0	0	9	1	1	2	1
非常勤事務職員	ALT	スクールカウンセラー	主事	学校司書	補助教員	計			
1	1	1	1	1	1	22			

**1 学校名、校長名**

インナイチュウブ  
大分県宇佐市立院内中部小学校  
中西 邦紀（カニシ ケイリ）

**2 所在地、電話番号、FAX番号**

所在地 大分県宇佐市院内町山城 91 番地      電話      0978-42-5601  
FAX      0978-42-5401

**3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数**

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
9	1	11	1	4	1	12	1	7	1	8	1	55	9
特別支援学級		上院内分校											
児童数	学級数	児童数	学級数										
1	1	3	2										

**4 教職員数**

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭
1	0	1	0	0	8	1	0
臨時講師	非常勤講師	臨時学校主事	事務職員	支援員	計		
3	0	1	0	0	15		

**1 学校名、校長名**

インナイホクブ  
大分県宇佐市立院内北部小学校  
水脇 純一（ミヅワキ ジュンイチ）

**2 所在地、電話番号、FAX番号**

所在地 大分県宇佐市院内町櫛野 646 番地      電話      0978-42-5201  
FAX      0978-42-5607

**3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数**

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
12	1	16	1	12	1	16	1	17	1	17	1	91	8
特別支援学級													
児童数	学級数												
3	2												

**4 教職員数**

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭
1	0	1	0	0	9	1	0
臨時講師	非常勤講師	臨時学校主事	臨時事務職員	支援員	計		
1	0	1	1	1	16		

1 学校名、校長名

大分県宇佐市立南院<sup>ミナミインナイ</sup>内小学校  
木村 永生 (キムラ ナガオ)

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 大分県宇佐市院内町下恵良 687 番地 電話 0978-42-5034  
FAX 0978-42-5043

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
1	1	2		5	1	2		6	1	4	1	20	4
特別支援学級													
児童数	学級数												
0	0	※2・3年、4・5年は複式学級で1クラス											

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭
1	0	1	0	0	3	1	0
臨時講師	非常勤講師	臨時学校主事	事務職員	支援員	計		
1	2	1	0	0	10		

1 学校名、校長名

大分県宇佐市立安心院<sup>アジム</sup>小学校  
岡本 京子 (オカモト キョウコ)

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 大分県宇佐市安心院町木裳 115 番地の1 電話 0978-44-0025  
FAX 0978-44-0167

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
8	1	16	1	17	1	26	1	26	1	24	1	121	7
特別支援学級													
児童数	学級数												
4	1												

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭
1	0	1	0	0	9	1	0
臨時講師	非常勤事務職員	臨時学校主事	事務職員	支援員	計		
0	1	1	0	1	15		



### 1 学校名、校長名

大分県宇佐市立佐田<sup>サダ</sup>小学校  
小屋瀬 八重子（コヤセ ヤエコ）

### 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 大分県宇佐市安心院町佐田 215 番地 電話 0978-44-0154  
FAX 0978-44-0209

### 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
6	1	4		5	1	4		8	1	4	1	31	4

※2・3年、4・5年は複式学級のため1クラス

### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭
1	0	1	0	0	4	1	0
臨時講師	非常勤講師	臨時学校主事	事務職員	支援員	計		
0	2	1	0	1	11		

都道府県教育委員会／都道府県私立学校主管課／国立大学法人附属学校主管課

①名称	大分県教育委員会
②住所	〒 870-8503 大分市府内町3丁目10番1号
③連絡先	代表 097-536-1111（内線 5611） 直通 097-506-5607 FAX 097-506-1796 E-mail takahashi-yasunari@oen.ed.jp
④担当者	所属・職名 高校教育課高校教育指導班 指導主事 高橋泰成 義務教育課義務教育指導班 指導主事 舟越宣之